時事新報從業員編纂

# 大毎東日資本閥に蹂躙された福澤精神

時事新報解散の眞相!!

10 sen

.344
特253
954

始

特253
954

舊時事新報從業員編纂

大毎
東日

資本閥に蹂躙された

福澤精神

時事新報解散の眞相！

昭和十二年・帝國大学

# 緒　言

## 全サラリーマンに告ぐ

五十餘年の傳統と自由主義の最後の牙城であつた福澤イズムの發祥地時事新報も遂に時代の潮流に抗せず去る昭和十一年十二月三十一日を以つて名實共に日本ジャーナリズムの上からその影を消して了つた。時事崩壞はその裏に明かに時代的反映を印するものがあると同時に時事潰滅を動機として所謂新聞經營のギャング行爲が暴露されたものと云へる。

卽ち時事新報解散の直接の原因は、その表面上唄はれてゐる如く慥かに財政上の理由にあつた。積年の經營者の不手際と無責任が遂に事を玆まで運んだ重大な原因ではあつたが直接の動機となつたのは松岡、前田を一味とする東日、大每の

新聞ギャングの仕業だと云ふことが出來る。

前英文毎日の主幹であり大毎顧問であつた松岡正男、大毎がその株の大半を持ち大毎のお聲がゝりでどうにか一人前になつた夕刊大阪、その社長としての前田久吉、この二人が時事經營の代表者として一昨年十一月に時事新報に乗込んだことから今日時事の解散は云はゞ必至であつたと言へる。云はゞ時事は新聞戰線の異常なる競爭激化の犧牲として曾ての武藤山治君、讀賣正力松太郎君の刄傷事件等と同巧異曲の下に策せられた陰謀の血腥き犧えとなつて現はれたものと云ふことが出來る。ギャング流行りのアメリカジャーナリズムの影響を日本程多分に受けてゐるところはなく、次々に展開されて行くその醜惡なく新聞經營の裏面は誠に驚嘆すべきものがある。

然かも時事一千の從業員は實にその忍び得る限りの最大限度の犧牲を忍んで來た解散當日の十二月二十四日の午後まで編輯に營業に工場に夫々平常と變りない



懸命の仕事をつゞけて來た。だが、その解散によつて吾々一千從業員に答へられた最後の生活を支える退職手當、解散手當は殆んど大部分の人々に取つて僅かの生活しか支え得ぬものであつた。その上、松岡、前田によつて確く口約されてゐた時事玉碎は全くのペテンで實は東日、大毎へ身賣りとなつて最後の日に發表せられるに到つて遂に柔順なる羊群も敢然立つて社會正義を高唱する一團となつて彼等奸惡の張本人に反擊を加へるため勇猛果敢の闘爭に入つたのである。

闘爭八日の結果、吾々一千從業員の主張はその精神に於て完全の勝利を占めた勝利は吾等の側にあつた。社會の正義は吾等の血によつて辛じて保持し得られた。そして全日本サラリーマンの上に、從來青白き存在として勞資何れの側からも嘲笑的態度を以つてみられてゐた所謂インテリゲンチャの上にも、今回の時事社員闘爭を通じて新たなる光明がきざして來たと云ふことが出來るであらう。

誠に今回の時事社員大會及びその闘爭は日本社會運動史上正にエポック、メー

キングの出來事として永く世人の記憶に殘るばかりでなく、向後新聞人及サラリーマン運動の動向に重大な示唆を與へるものであらう。

時事新報最後の日は或意味に於て日本自由主義の沈鐘とも目さるべきであるが自由主義の沒落から次に來るべきものの何であるかは、又この時事最後を飾る社員闘爭の歴史的事實によつて充分推知することが出來るであらう。

新聞ギャングの代表的人物としての松岡、前田の全行動、その蔭におどる闇の人々それ等奸惡の輩に對して敢然闘爭をつゞけ最後の勝利を收め得た一千の人々の闘爭日誌は乞ふ後章に於て熟讀されんことを。

昭和十二年一月

**舊時事新報社從業員一同**



# 目　次

**解散から闘爭へ**

全從業員正義のため蹶起……（一）
宿命の解散は遂に決定……（二）
全從業員の不滿一齊に起る……（三）
松岡會長が掲載せんとした社告……（四）
憤懣爆發して社告を訂正……（六）
從業員の總意による社告……（八）
全從業員結束して起つ……（九）
兩重役を社員大會で面詰……（一〇）
愛國新聞義俠的に提供さる……（一二）
同情に感激しつゝ發送に苦心……（一三）

更に五萬部を街頭に送る……（一五）
門野幾之進氏に嘆願決定……（一六）
連夜徹宵する門前の陳情隊……（一九）
今夕新聞の題號を借りて訴ふ……（二〇）
狼狽の東日が號外賣を買收……（二一）
抗爭週餘籠城越年を覺悟……（二二）
六十萬部增刷して全市に配布……（二二）

## 時事新報最後の日

經濟鬪爭解決から訣別まで……（二五）
解決の曙光更に見えず……（二六）
大詰は次第に近づく……（二八）
警視廳て最後の交渉……（一〇）
不滿ながらも調停に應ず……（三一）



元旦未明に經濟鬪爭打切り……（二二）
涙の裡に社旗と訣別……（三三）
宮城を遙拜して去る……（三五）

## 解散に至る迄

松岡、前田兩氏の乘込み……（三七）
運轉資金を忽ちに浪費……（三八）
內外を欺瞞して社內を攪亂……（三九）
兩重役不信任の聲起る……（四一）
山本悌二郎氏乘込運動……（四二）
重役更迭の裏をかく大芝居……（四六）
時事の解散は計畫的大陰謀……（四八）
遮二無二解散させた兩重役……（五〇）
株主總會速記錄……（五一）

## 外部よりの後援


記者團總聯盟の全面的援助……（五九）
總聯盟直ちに活動を開始……（六〇）
メッセージ……（六一）
各記者倶樂部も擧つて支援……（六三）
愛讀者からの激勵の信書……（六四）


以上



# 解散から鬪爭へ

## 全從業員正義のため蹶起

十二月二十四日！　この日こそ明治、大正、昭和の三時代に亙して輝かしい文化の足跡を殘こして來た時事新報が運命を決するの日だつた。編輯局は全く悲壯な氣に滿たされてゐた。營業も工務も均しく、各人各樣、沈痛な色を浮べ、僅に知り得た材料を以て運命の指標を推定してゐた。編輯室の古典的な火鉢を取卷いて私語が交さるゝなかに社會部の電話がけたゝましくニュースを入れて來る。愈々今日限りと云つた推定も消飛んで意識を取戻し鉛筆を握る。世の常の職業なる言葉を當てるにはあまりにも悲壯だ。表現の的確を期するならば、今にも倒れんとする兵士が銃を持直して最後の一發をねらふと云つたものではなからうか。そう〳〵我らの社祖福澤先生は、上野の銃聲を聞きながら講義を進められたのだ。無意識化されたこの社祖の精神が意識化されたとき全從業員の

純情は云ひ知れぬ喜びに満たされた。よし解散となつてもこの精神らしい最後にしたいものだと均しく之れを願つた。

## 宿命の解散は遂に決定

午前九時二十分株主總會は解散を決定したとの報が入つた。十中八、九解散は不可避と推定はしてゐたものゝ、さて最後の斷定を下されて見れば寂しい。共に論じ、共に筆をとつた社友とも別離だ、華々しい討死を吾らに宣明してゐた重役は解散に當つてどんな挨拶をするだらうか。と別離の悲哀のなかに次に來る問題が均しく頭に浮びそれを待つ。併し重役は、正午になつても正式に何の報らせをもたらして來ない、全員集合の張出しもない。今まで重役の意思を傳ふると自任してゐた部長連中からも何の挨拶もない。尋ねれば解散に決まつたそうだよと、まるで他人事のように言ふ部長もある位だ。何となしの不安が涌いて來た。最後の日の新聞は、どんなに作る方針だらうか、最後の新聞こそまことに時事新報らしいものを作りたい——この從業員の熱望と部長級の意思との



間には何かへだゝりがあるように感ぜられて來た。出る當てもない新聞の記事を書たり整理したりする社員を見ると何とはなしに涙をそゝる。公平を期すると云ふ解散資金の分配と共に、最後の新聞への不安が時がたつに從つて濃化して來る。

## 全從業員の不滿一齊に起る

かうした不安が涌いて來たとき、午後三時頃だ、時事新報は東京日々と合併して新題號は『時事新報合同東京日々新聞』となるとの報がもたらされた、これには全從業員驚愕した、全員は玉碎を期し亦重役も之れを我らに誓つてゐたのだ。不安が現實に迫つて來た。合併と稱する以上當然全從業は東日へ移轉すべきものであるのに、一千の從業員を師走の街頭に投げ出したまゝ題號のみ東日と合併とは何事だ。重役、幹部の陰謀を裏づけるニュースが續々と入つて來るに從ひ全員の憤懣の聲がいよ／＼高まつて來た。この全員の憤懣を爆發させたのが廿五日附朝刊に掲載される筈だつた「本紙讀者に急告」なる重役製の社告だ。思へ！ 廿五日の朝刊は、われらが最後の新聞だ。その

新聞に掲載せんとした次の如きインチキ社告！　これを若しこのまゝ掲載せんか、われらの最後の希望までが踏みにじらるゝのみならず、世人は何處に時事新報の歴史を見出すか？

## 松岡會長が掲載せんとした社告

明治十五年三月、世道人心を指導すべき大精神の下に、福澤諭吉先生は我が時事新報を創刊しました。爾來、時を閲する五十有五年、回を重ねる一萬九千二百五十號、終始一貫、權力に屈せず時流に阿らず、如何なる障碍をも打破して公平無私、穩健中正なる筆陣を張つて、その使命に精進し來り得たるは、偏に讀者諸彦御後援の賜と深く感謝の意を表する次第であります。

然るに、世は明治、大正、昭和と進むに從ひ社會情勢も亦舊の如くならず、しかも昭和十一年の將に暮れなんとする今日、我國政治經濟界は漸く一大轉換期に直面してゐるやに看取されます。翻つて我が新聞界の實情を顧るに、大小多樣の新



聞が割據しつゝしかも全國民にその歸趨を指示するもの極めて寥々、ひとり我が時事新報とその主張主義を同うする東京日日新聞が一心同體の良友として相提携し得るのみであります。仍つて我社は此の重大なる我が國情の大勢を達觀し、且つ光輝ある我社の大方針を貫徹すべく熟慮の末、二十四日株主總會に於て株式會社時事新報社の解散を決議し、東京日日新聞と併合することに決しました。

勿論、之は新聞本來の大使命を益々達成せんが爲の統合であつて、かくてこそ我社傳統の精神は東京日日新聞の精神と渾然融和合致して永久に我國文化の一大光明たり得るであります。

讀者諸彦には幸に我社今回の擧に贊同せられ、本日夕刊より配達する東京日日新聞を引續き御愛讀あらん事を切望する次第であります。

昭和十一年十二月二十五日

時事新報社

# 憤懣爆發して社告を訂正

この社告の何處に玉碎があるか。この社告は東日重役の檢閲を經てゐると云ふことだ、何處に松岡、前田兩重役に最後の誠意を認めらるゝか、何が一心同體の良友だ。時事新報は經營的にこそ倒れたりと云へども、その主義は主張は到底東京日々如きによつて傳へらるものではないと均しく全從業員は天下に誇示してゐるところだ。こゝに於て遂に今まで壓へ〳〵てゐた我らの憤懣は爆發した。早速社員大會が開かれ、この社告を我ら社員獨斷で掲載せざることこそ福澤先生への最後の奉仕だと一致し、起草委員をあげて次の如き從業員總意による社告を起案するに至つたのだ。

## 從業員の總意による社告

明治十五年三月、世道人心を指導すべき大精神の下に故福澤諭吉先生は我が時事



新報を創刊、爾來、時を閲する五十有五年、號を重ぬる一萬九千二百五十、終始一貫、權力に屈せず時流に阿らず、如何なる障碍をも打破して公平無私、穩健中正なる筆陣を張つてその使命に精進し來り得たのは、偏に讀者諸彦御後援の賜と深く感謝の意を表する次第であります。

然るに、世は明治、大正、昭和と進むに從ひ社會情勢も亦舊の如くならず、昭和十一年の將に暮れなんとする今日、我國政治經濟界は漸く一大轉換期に直面してゐるのであります。しかもこの時に當つて我が新聞界の實情を顧るに、大小多樣の新聞あるも全國民にその歸趨を指示するもの極めて寥々、我が時事新報は此間に處して全國民の指標たるべき微衷を盡し來つたのであります。然るに今日に至り飛躍を企圖する增資案成らずして資金難に陷り、玆に刀折れ矢盡き、二十四日株主總會の決議により時事新報社は遂に解散することになりました。

勿論我社は玆に玉碎すると雖も、光輝ある傳統の精神は永久に我國文化の一大光明として不滅なることを確信するのであります。

終りに讀者諸彦多年の御愛顧に對し社員一同謹んで深謝致します。

時事新報社

かくて我らは首腦部の魔手がこの社告を强奪することをおそれ十數名の警備班を派して降版から輪轉機にかけらるゝまで看視し續けたものだ。この最後の歴史的時事新報が、發送の不充分によつて全愛讀者に渡らなかつたであろうことを我らは最後までおしむものである。

編輯局の空氣はいよ〳〵硬化し、直に抗爭に入るか或ひは支給額を受取つた後かが論ぜられ遂に總意によつて、株主總會に重役が社員の生活不安を除くと云つた誓言が果して如何なるものかを待ち、その結果に應じて善處することに決した。午後十一時過ぎになつてようやく解散手當、同慰勞金及び月給、賞與が手渡された。受取つて見た全從業員は區分こそ四種類になつてゐるが、解散資金七十五萬圓の公平な分配にしては、あまりにも生活不安が大きいことを直感、これには重役の不公平な處置が伏在するのではないか？　と均しく感じた。



## 全從業員結束して起つ

期せずして重役の説明を聞かうと云ふことに一致し從業員大會開催の要求が各部一致して叫ばれた。その眞意は社告に對する重役の意向を確かむると共に七十五萬圓の使途糺明に在つた。このとき誰が元旦に及ぶ抗爭を意圖してゐたろうか？　支給額よりも精神的に華々しい解散をこそ意圖してゐた從業員だ、而も何らの組織も持たず又何ら抗爭の經驗をも持たぬ從業員ではないか。重役の不誠意――たゞこれこそ組織も持たず經驗も持たぬ時事一千の從業員、蒼白きインテリと云はるゝサラリーマンを立たしめたものである。

「從業員大會の要望は容れられて各部課から直に委員が選出され『編輯全從業員大會』が編輯局に於て開かれた。まことに歴史的な記念的な而も劃期的な大會であらう。緊張と昂奮の交錯、大會の要綱は重役によつて汚されんとする福澤精神の宣揚と我らの生活保障の要求である。その生活に關するものとしては、

一、退職手當は一ヶ年を支給すべし。

一、退職慰勞金は內規通り支給すべし、內規なき從業員（註雇員その他を云ふ）にもこれを準用すべし。

一、勤續年限の端數はこれを切り上ぐべし（一ヶ年未滿は一ヶ年とし、六ヶ月未滿は六ヶ月とすべし）

の三項目で福澤精神宣揚と共に滿場割れんばかりの拍手のうちに全會一致で可決確定し、松岡、前田兩重役に手渡しその實行を求むることになつた。間もなく兩重役は全員の激怒を浴びながら正義の審判をうくべく壇上に立つた。

## 兩重役を社員大會で面詰

直ちに前記我らの要求を提出し質問に移れば機關銃のそれを思はせるが如く續き、あらゆる部門に亘り專門的に詳細に糺明された。壇上の兩重役の答辯はこれ又しどろもどろで、その不正はいよ



〳〵尻尾を隱し得ない有樣、お手のものゝ速記をやつつてゐるので出鱈目は云へない、結局我らの要求に對しては『誠心誠意身命を堵して諸君の滿足を得るよう努力する』との言質は與へたが重役會を開催してその承認を得る必要があると云ふので、廿五日午前十一時本社に於て從業員立會のもとに重役會を開くことを言明させ、別個に慰勞金手當等の基準となつた本給算定法の誤謬、會計の純然たる計算違ひ等は專務の獨斷を以つて追加支拂ふとの言質を獲得、實に午後三時半に及び今後の部署を分ち定め一先づ大會を終つた、編輯局の中心に掲げてある福澤先生の瞳はじつとこの社員大會を見つめてゐた。凡らく我らの行動に對して支援をされてゐる如く我らは感じたものだつた靜か動か分岐にあつた我らの態度はこの大會によつて決定した。重役は社告の非を認めようともせずあくまでも、その誤れる意地を張らんとしてゐる以上我ら又その非違を糾さずば所謂何の面目あらんと云ふことに一致し、更に七十五萬圓の使途は答辯によつて益々その不分明さを思はせるのみだつた。かくて我らは一致して重役の非違を糾す決意を固め我らの要求が通るまでは我らの社屋に籠城することを誓つたものだつた。

## 愛國新聞義俠的に提供さる

第一夜を籠城に過ごした我ら從業員の意思はいよ〳〵堅く團結し、一方新聞通信記者總聯盟の絶對支持は磐石の力强さを思はせ、重役との交渉は開始された、こゝに於て我らは我らの行動があくまでも精神的運動であると共に經濟闘爭にある旨を廣く一般に宣明する必要を痛感した、このとき廿五日夜愛國新聞が提供されたのだ。この提供は而も編輯局同人によつて自由に編輯されて差支ないと云ふ好意さへ示され、無料で五千部印刷しようと云ふ全く絶對的と云つた好意のものだつた。委員の間に又從業員の間にその新聞が持つ背景を心配したものもあつた、併しこの心配は提供斡旋者の說明によつて氷解し、全從業員は我らの精魂を込めた新聞を作らうと叫び、提供者に對して均しく萬腔の敬意を表したものだ。

いよ〳〵二十六日は我らの新聞を作る日だ。何ら經營的な拘束もなければ、何ら主義的な牽制もないのだ。我らは我らの純情を紙面に打込み、そして松岡、前田兩重役の非違を、而も傳統輝かし



い時事新報の精神までも一個の商取引の材料に資せんとしたことをそのまゝ書けばいゝのだ。何の扮飾も、何の形容も必要ではない事實そのまゝこそ無上の扮飾であり且又限りない形容ともなるのだ。定められたことに從ひ定められた人達は早速筆を取つた。從業員の宣言は出來た、七十五萬圓使途の內容が明かにされ不明の金が明かにされた、東日と重役の通謀の記事が出來た、株主總會の速記が譯された、新聞通信記者總聯盟を初め各方面の督勵の辭が原稿に移された。擔當記者は何れも感激と感慨との交錯のうちに、つとめて短時間のうちにその筆を運んだ。整理に廻つた編輯記者は見出しに智腦を絞り、かくして愛國新聞の工場に同人が赴き最後まで我らの熱情を打込む有樣だ

さあ五千部出來上つたぞ、見よ！　出來榮を、立派だ〳〵、我らの運動に一大躍進をもたらすものだと編輯局の隅々に歡呼の聲があがる。

## 同情に感激しつゝ發送に苦心

紙は五千部だ、一枚も無駄にすまい、一人が讀み終れば次に渡して讀むと云ふ要心さだ。一面に

は先づ我らの宣言を載せて七十五萬圓の使途に及び、ついで重役と東日との通謀を明示し、二面に於て二十四日の從業員大會の記事、解散發表までの經緯更に從業員の總意による社告が再錄されてゐて、ともに載せられてゐる松岡會長が掲載せんとした社告と對比し一見にして重役の心情陋劣さが見らるゝ、三面に於ては株主總會の記念すべき速記錄を藏めて今まで洩れなかつた內容を示して大衆の批判を待つ、各面夫々行屆いたものだ。

さて愈々これが發送の段取となつたが、我らは先づ街頭に立つてこれを發賣し、僅少な我らの活動資金とせんとしたが、色々の都合でそれが困難なことを知り社の前で發賣した、賣れる〳〵さながら飛ぶように賣れる、僅か一錢で時事解散の陰謀が知れるのだ、三部四部と買はれる有樣、而も五錢玉を出しお釣りは君らの資金にし給へと云ふ通行人の續出には全く感激したものだ。さて大量的配布について考慮してゐるところへ、我らと同じ立場にある專賣店から一つの申込みがあつた。我らの手でも配布したい、併し我らの交渉の都合もあるから二十七日にして貰へまいかと、この專賣店は今回の解散によつて當然その職を失ふ人達だ。こゝに於て我らも亦その意を諒とし專賣店に



よる配達のため一萬五千部更に慶應出身者に郵送するため二萬部、更に街頭配布のため五千部と都合四萬部の大量增刷をやることに決し、直ちにその手配に取かゝつた。

## 更に五萬部を街頭に送る

さあ二十七日、今日こそ五萬部を我らの手で街頭に送る日だ。先づ丸の內は美觀地區なるため丸ビル、海上ビル內にて配布した、いづれもむさぼるように讀み入つてゐるではないか、ついで銀座に繰出した、一千部の紙はまたゝく間に飛んで行く、だれもかれも讀み耽り、丁寧にたゝんでポケットに入れ熟讀しようと云ふ熱心さだ。上野、淺草、新宿と繰出し、各方面とも意外な反響、『初めて知つた、東日は時事の人達を蹴り出してゐながらあんな社告をしてゐるのですか』と問はるゝ有樣配布隊は新聞をくばりながら說明に大童だつたと愉快な報告をもたらした。かくて我らの行動は愛國新聞によつて社會人の耳に目に入つた、同情は湧然と涌いて來たのだ。

## 門野幾之進氏に嘆願決定

かくの如く我らは我らの行動の純眞さを一應社會に訴へたが、もつと我らの身近にある人に對して我らの眞情を吐露し、我らの眞意を傳ふる事が必要ではないかと云ふことに思ひ至つた、このことは今までこの運動の當初に於て我らが均しく考慮討議した問題であつたが、その當時に於ては種々の都合により一先づ留保されてゐたものだつた。ところがいよ〳〵かくの如く社會に我らの眞情を訴ふることになつた以上、今又改めて前記の問題を再檢討する必要を痛感するに至り、考慮の結果全員一人の異議もなくこの問題を實行に移すことになつた。その方法は徒らに多岐に亘るべきではないとの見點からわが時事新報にとつて最も關係深く而も松岡、前田兩重役選衡に當つて當面の責任を持たるゝ門野幾之進氏を選ぶことに決定、一度同氏に面會して我らの衷情を訴へ同氏の善處を希望することゝした。この面會には相當の困難を覺悟、或ひは徹夜の勞も必要となるべく或ひは精神的苦痛も亦しのばねばならぬことを豫期してゐた。而してこの老體をわづらはすことについては全く情に於て忍び得ないことも考慮したが、その後重役の誠意殆ど見るべきものなきところからこの擧に出ざるを得なくなつた次第でもある。かくて議決したのが廿七日夜、早速第一回の陳情隊――我らの間で自然發生的に挺身隊なる言葉で愛稱されてゐた――が各部課から夫々選定され、午後八時左のような嘆願書を携へ萬雷の相手におくられて出發した。自動車五臺滿員の陳情隊の面には悲壯な決意が浮んでゐた。



## 嘆願書

五十五年の光輝ある時事新報社は去る廿四日の株主總會に於て遂に解散せられ、吾々從業員は突如この暮の街頭に投げ出されたのであります、しかもその解散に當つて重役より支給せられたる解散慰勞金並びに解散手當は從來屢々松岡、前田兩重役が言明したところに反し退職手當內規の適用を見ざるのみか誤算に基く所謂涙金を支給せられたに過ぎないのであります。しかも吾々從業員は光輝ある福澤先生の

傳統的精神を飽く迄擁護すべく玉碎を豫期しつゝありしに拘らず、松岡、前田兩重役は吾々の意志を全然無視して大毎合併を企てたのであります。吾々從業員は既にこの一事を以てしても重役の背信行爲に憤激措く能はざるものがありますが、剩さへかゝる僅少なる解散慰勞金並に手當を以て突如失業の憂目に遭遇しては一家を抱へて全く飢餓線上に彷徨するの他途はないのであります。吾々は門野先生が之まで時事新報の爲に幾多の御盡力を賜つた御好意は知悉してゐるものでありますが、この窮境に起ちては、かゝる現重役を推薦したる當面の重大責任者たる貴下の深甚なる御配慮に依るの外なく、茲に敢て吾々の衷情を披瀝して少くとも從業員に對しては內規通りの解散慰勞金並に本俸一ヶ年分の解散手當を支給し得るやう充分の御取計ひを嘆願致す次第であります。

昭和十一年十二月廿七日

門野幾之進先生

時事新報社從業員一同



## 連夜徹宵する門前の陳情隊

運命は陳情隊に幸運の手をさしのべなかつた。訪れて嘆願書は提出したが訪ねる御本人は不在、而も家人はその行先さへ明示してくれず、門外退出を求めてやまなかつた。こゝに於て我らが案じてゐた最後の一線を張るより外方法はなくなり遂に、門前に車を並べて徹夜でも否幾日も〳〵面會出來るまで頑張るの餘儀ない仕末になつた。この我らの方法に對して非難する關係者もあつたやに聞くが我らのこの眞情をその非難する以前に聽いてくれたら、その非難は反つて我らに與ふる激勵の辭に代らなかつたろうかと思ふ。遂に徹夜の戰術はとられた。本部からは蒲團が送られて來る、徹夜の陣が悲壯なる決意を示してゐると同樣本部に於ても同樣の決意で變りなく交渉は續けられてゐた。この挺身隊派遣は重役初め關係者に非常なショックを與へたようだ。監査役速水篤治郎——門野氏の秘書格の人間だ——の如き門野氏の心證を惡くすることを恐れてか、口を極めてこの挺身隊の中止を要望してゐた。挺身隊による掩護射擊は本部の交渉に絕大な力をあたへたと云つても

過言ではない。かくて第一夜を寒空に明かし廿八日、廿九日と意氣ます〳〵揚る面持ちで挺身必死の陣は堅固に張り進められたのだ。所轄島居坂署でも我らの陳情の精神をよく理解してくれ、たゞあくまでも理解せず否理解しようとしなかつたのは重役連中のみだつた。

## 今夕新聞の題號を借りて訴ふ

かくて外部的には愛國新聞による眞相の發表、內部的には挺身隊の活躍により愈々社會的反響は大きくなつて來、更に抗爭は一糸亂れず一週間餘に及ぶに至り、我らの行動に同情を寄せてくれてゐる人に對し、又尙知らざる社會人に對する運動の經過を公にする必要を痛感してゐたとき、何と我らは幸運なことであろう！　帝國今夕新聞社が我らにその題號を貸與へてくれたのだ。我らは自らの手によつて我らの時事新報を印刷してゐた輪轉機を動かすことを決意した。この決意をするについては各方面への萬善の準備をほどこしてのことだ。全從業員の感激は一段と高まつた。我らの輪轉機が動くのだ。讀者よ！　この感激こそは我らが全運動を通じ最も感銘深いもの〻一つだつ



た。全く我ら自身輪轉機を動かさうとは運動の初期に寸豪も豫定しなかつたことだつた。休息した心臟が呼動を再び傳ふるのだと云つた感激にしばしば耽つたものでした。

編輯能率は百パーセント、直ちに原稿は出揃ひ整理は出來、植字、校閲等々上々で、直ちに印刷に付せられたのだ。おゝ！　休眠週餘の輪轉機はうなり出した、まるでともに重役の非違を糺明せんとするかの如くにさへ響き耳を打つ。一頁の號外だが感銘深いものだつた。二十萬部夜を徹して印刷し、翌卅日拂曉より各自街頭に飛び出して一枚のむだもなく配布したのだ。前回の新聞配布で既に經驗濟みのこと、能率は上々で效果は着々とあがつて行くがように思へた。

## 狼狽の東日が號外賣を買收

更に今度は專門的に處置し早朝號外賣りを招集して、これに托すると云つた按梅、號外々々の賣聲は世界的ニュースのの報導のように力强く我らに響いた、全市に十六萬、我らの手によつて撒布今日は專賣店の逡巡により、その手を藉りず全く我らの足によつて手によつて撒布したゞけに感

銘深い。即ち省線山手、中央、京濱の各要驛に從業員が持參して撒布し更に遠く横濱、川崎、小田原、桐生、千葉方面に相當量を配布し、その地方に於ける我らの同志支局員の手によつて撒布したものだ。この號外戰術はいよ〳〵東日の度膽を拔いたらしく、號外賣りの一部は東日の手によつて買收さへされた程で、全く東日の販賣當局をして顏色なからしめたことは實に今考へても痛快だ。

## 抗爭週餘、籠城越年を覺悟

卅一日、世人は大晦日とて越年に大童だが我らはいよ〳〵結束を堅くして越年をも辭さなかつた運動の眞相發表は機會ある毎に續けられ、その眞相の發表が東日販賣網を攪亂すると云つた結果を生んだと云ふも、罪は攪亂された方にこそあるのだ。我らは前記號外よりも更に精巧なる號外の發行を意圖した。それは二頁よりなる完全なものだ。自然發生的にもりあがつた我らの運動が、日がたつにつれ、警備に兵站に各方面に亘つて實によく組織化して行つたように、我らの眞相發表の宣傳も亦同樣に進捗して行つたものだ。二頁の號外、それは實に內容的に又形式的にも大新聞に比較



して見劣りしないものだつた。籠城の寫眞を扱つてゐる一方には漫畫を用ひてゐると云ふ按梅、そして今度の眼目は東日がなした合同の欺瞞の暴露に意を用ひ、松岡、前田兩重役の東日通謀を徹底的に扱つたことだつた。

## 六十萬部增刷して全市に配布

直ちに輪轉機にうつして印刷にかゝれば、物凄いスピードで刷りあがつて行く、我らは考へた、これこそ恐らく時事新報社屋に於ける輪轉機の最後の活動だろうと、刷つた〳〵六十萬だ、我らの宣傳はさきに愛國紙で五萬を刷り、ついで今夕紙號外一號で二十萬を刷り實に今度はその三倍の六十萬だ、飛躍、これをしも飛躍と云はずば何をか飛躍と云はんと云ひたいところだ。かくてこの六十萬は、某社の好意によつてその元旦第一號の新聞と共に帝都全讀者に洩れなく配布されたのだ。その某社の躍進を信ずるならば我らのこの號外第二號の配布が極めて有效だつたことを我らは深く喜ぶものであり更にその反面東日販賣に對して一大打擊をあたへたことを信じて疑はないものであ

る。

かくの如く新聞による宣傳の一面、我らは各自福澤先生の面に土を塗らんとする松岡、前田兩重役を我らが阻止してゐる漫畫を入れた葉書を各方面に年末年始に出して效果をあげた、その數一萬餘枚、山椒は小粒ながら辛いと云つた味がよくこの一葉の葉書に表現出來たものと思つてゐる次第である。



# 時事新報最後の日

## 經濟鬪爭解決から訣別まで

正義の大旆を振り翳した吾ら一千の從業員は外部に向つては大義名分のため日頃鍛へた腕、足の總動員を行つて陰謀暴露の筆陣を張り、一絲亂れぬ結束の下に當然の要求貫徹のため家も妻子も忘れて鬪ひ過ごすことゝに八日目——今日は三十一日だ、街は刻一刻と近づく新春の喜びが滿ち溢れ、やがて終る昭和十一年の慌しさは日頃人通りの少い丸の内街にも映じ、早朝と云ふに大晦日らしい氣分がする。

『明日は元旦だ、あゝ……俺達は新春早々から失業者なのだ」窓の隙間から吹き込む、冷たい師走の風を腹の底迄吸ひ込んだ一給仕君は『警備』の碗章をつけて徹夜に赤くした眼をこすり乍ら窓越しに往來の人通りを見下して太い溜息をついた、僅な時間を交代して机の上や、廊下の一隅で眠り

をとつた連中も起き、幾日振りかで歸宅した連中も集合した。
『正月は籠城』『闘爭のまゝ正月を迎へろ』等々誰が書くとはなしにビラが方々に貼られ、正月を明日に控へてゐるだけに悲痛な空氣が漂つてゐる。
今日の社員大會は未だ開かれない、時計は午前十一時を指してゐる、各部毎に待期してゐる從業員の興奮は今迄にない險惡なもので委員も又極度に緊張して協議——戰術と情報に血みどろの活動を行つてゐる『松岡前田は今〇〇に現れた』『今〇〇に這入つて行つた』寒風肌をさす街頭に、松岡、前田の行動を監視し、尾行する情報委員からの報告は頻々として統制委員室に集まつての報告を受けた中央委員は、その道で永年苦勞してゐる社會部員の新手を出動せしめて二段、三段構えの尾行陣を張り一分、一秒の行動をものがさぬやうに努めた。

## 解決の曙光更に見えず

緊張裡に過ごす時間は早い、濠端の松は薄黒いベールで包まれ始めた、夕暗は迫つたのだ、讀者



を始めとして友人達からの激勵文や同情金はドン〳〵到着する、これを資金部の委員が報告する度びに拍手の嵐は捲き起る、今日は正に戰ひのクライマックスを思はせる。
世間から詐欺漢視され始めて冷血漢松岡、前田の二人は一千從業員の正義の鞭と當然の要求の大刀に追ひ廻されてゐるのだ、果して今日は彼奴等が公言した『責任を持つて努力する』の約束が履行できるか、待期する全從業員は既に人間的に尊敬出來ぬ松岡、前田ではあるが、生活のためには二人の行動は、重大である爲、情報を中心として種々語り合つてゐる、連日門野幾之進氏邸前に霜凍る夜も、頰をもぎ取るやうな風が吹き捲くる日中も頑張り通した挺身隊の交代も行はれてゐる。
「生れて始めて悲しい正月を迎へるよ」
「俺は家に歸つて話をしたら、子供が聞いてゐて……お父さんはもう毎日僕の傍にゐられるのだね……と言つてたが……無邪氣さに泣けてならなかつた」
「俺のうちの子供などは大きいものだからお正月からルンペンだねと言つてゐたよ」
誰からとはなしに口火を切つた家庭の話に感じ易い連中は是も眼に涙を浮べて聞いてゐる。

職を奪はれ、僅な金で師走の街頭に叩き出された一千餘名の從業員、そして五千餘の家族『松岡前田の犬共この話を聞け！　そして腹を切つて家族に謝罪しろ』

一小使君は涙聲で叫んだ……こうした切實な叫びが夜の訪れと共に空氣を惡化した。

『御報告致します、某婦人から皆さんでおそばでもと金百圓の御寄贈がありました。』

割れるやうな拍手だ、全從業員は感謝の涙を浮べてゐる。

## 大詰は次第に近づく

そうだ、世間ではやがて年越しそばを食べる頃だ、一家揃つて正月の仕度し居ることだらうに吾々はどうだ、不安な氣持ちで待つ妻や子、そして父母や兄弟……除夜の鐘をなんと聽く、七時は過ぎた、そして八時も……「こうなれば俺達は個人的行動を起す」

若い血に燃える連中は押へきれぬ亢奮が爆發し始めた、と同時に交渉が決裂して正月に鬪爭が延長された場合、彈壓されやすまいかとの心配も起きて來た、たゞならぬ空氣は漂ひ出した、そこで



直ちに中央委員のAは警視廳に車を飛ばし北村勞働課長と會見した。

その結果、想像以上に好意ある言葉を得た、課長と會見が終つた頃、蒼白な顏をした前田はM委員の監視を受け乍ら警視廳勞働課内に姿を現した、舞臺は愈々大詰が近づいた。

A委員は直ちに歸社し、北村勞働課長の好意ある言葉を全從業員に傳へ、前田が警視廳に現れたことを報告した。

妥協か、決裂か、數時間内に迫つたのだ、統制委員十一名は各部に現れ、集つた情報に依り各部毎に意見を纒め、やがて警視廳に呼ばれるであらう。その時の態度を決定するために愼重に協議した『吾等が最も信頼して選出したのだから總て統制委員に一任』嬉しい言葉と共に各部毎に交渉に出發する統制委員に拍手を贈つた。

實に立派な態度だ、その信頼と委員を援助する部員との氣持ちが一致してこそ今日迄堂々たる統制を保つことが出來たのだ。

## 警視廳で最後の交渉

勞働課長室では松岡、前田を始めとして北村勞働課長、伊能調停課長、須田勞働課長等が協議を行つてゐる、昨日僅かな金で調停を依頼しに行き一蹴された松岡、前田が死力？　をつくして集めた金に對する分配方法を協議してゐるのだ。數時間後に迫つた運命……だが從業員の正義の劍未だ收めてはゐない。

一方昭和十一年はあと數分で終りをつげやうとした頃、統制委員（代表）一同は警視廳に呼ばれた。

「今日迄努力奔走し集めました金額は諸君が御滿足するかどうか分りませんが、吾々の最善の努力であります……今迄諸君と御話する時に激昂して濟みません云々」

との松岡の挨拶から交渉の火蓋が切られた、全從業員の死活問題を背負つた統制委員十一名の質問は火を吐く如く、松岡、前田の肺臟を突く、室外にはM、H、K、O、Mの委員が交渉を監視し



狀勢を本部に刻々通じてゐる、中央委員からはAとFが代表激勵のため警視廳に飛ぶ、更に第一、第二の代表激勵隊の準備は進められてゐる。

## 不滿ながらも調停に應ず

勞働課長室に於ては合同の美名に隱れて社會を欺瞞した點や、金額の不明の點に就き吾ら代表の鋭い鉾は向けられてから分配の本問題に入つた、僅か二十二萬圓では、それも不足分支拂に出した約五萬圓を差引けば十七萬圓足らずの金で、當然吾らの要求は充ない、否吾らの要求のホンノ一部に過ぎないのではあるが、彼らにこれ以上の期待は出來ない、それに又彼らの最善の努力もやゝ認められるので、この交渉に應じた以上吾ら代表は出來得る限り數字を詳細に調べ、少しでも餘計に獲得のために努めた。

一、解散手當二ケ月（本俸）の增額支給（當初二ケ月分の支給を受けてゐるため要求は一ケ年分であつたが、結果に於ては四ケ月分を支給されることになる）

一、内規による勤續年功加算率の三割支給（要求は内規通り支給）

の二つの結論を得て代表一同は直ちに本社に引上げて各部毎に報告した。

總ゆる犠牲と血みどろの闘争の結果得たものは僅にこれのみだ、餘りにも少い戰利品ではあるが最早これ以上を松岡、前田に望み得ないことと、新春早々皇居を前に籠城を續けてゆくことは誠に申譯ないことを考へ、一同涙を飲んでこの案に應じ代表者一同に『御苦勞様でした、有難う御座いました』と心からの禮をのべ『萬歳』を三唱した。

## 元旦未明に經濟闘争打切り

かくて闘争すること九日目、元旦の夜明け前に經濟闘争を打ち切ることになつたのだ、だが然し未だ、吾らの闘争は全部終つたのではない、陰謀の徹底的究明といふ大きな闘争が殘つてゐる、そこで直ちに全從業員大會は開かれた。

M委員が議長となつて議事が進められた結果、



一、繼續委員會を設置。

一、繼續委員は各部から二名選出のこと。

一、繼續委員會に於て就職の斡旋。

一、各委員並に交換嬢に感謝の意を表する。

等々を決議し、K統制委員から經過報告があつて二日に集合をすることにして解散したのが元旦の明け方であつた。

永い闘争に疲れきつた一同は重い足を引摺り家族が待つ家に歸つた。そして元旦一日は各自共充分休養を取つた。

## 涙の裡に社旗と訣別

明ければ二日だ、吾々が闘ひとつた金を受け取る日なのだ、全部は正午に集合した、各部委員に依つて受け取る金額と除名者の調査が嚴重に行はれた後、金を受け取つた。これで一千餘の從業員

は新しい人生に向つてスタートするため永年住み馴れた社屋に別れ、一つ飯を食べた同僚とも別れなければならないのだ。

「お芽出度う」などと言ふ者は一人もゐない。再び就職戰線に叩き出された人々の會話は正月といふに悲痛の極だ、全員は屋上に整列した。仰ぎ見れば、大空高く時事新報旗は新春の風に翻翻として飜へつてゐるではないか。不偏不黨の大精神で常に世人を指導し光明を與へて來た——わが國唯一の精神を持つ新聞——時事新報の最後の日なのだ。

見上げる數千の眼、萬感胸に迫つて聲はなく、風で鳴る社旗のハタメキが胸を打つ『時事新報よさよなら』誰もが心の奥で社旗に袂別する氣持……悲慘な極みだ。自然にこみ上げて來る涙、女事務員達はたまりかねて聲をあげて泣いた。愛社心に燃えるこの全從業員の氣持ちを誰れが知る。

「時事新報は十二月三十一日で無くなりました、私はその最後迄署名人としてゐた關係上、私が社旗を下します」社會部の長老中島龜次郎氏の聲は震へてゐる、事業部員の手に依つて設置されたスピーカーからは「螢の光」のレコードは鳴り出した、これに和して全員唱へば高塔に飜つてゐた



社旗は時事新報最後の署名人中島龜次郎氏の手によつて下された。歌聲はやゝともすれば涙でとぎれる。

思へば福澤大先生の精神を受け繼いで今日迄五十五年歴史と傳統を誇る時事新報はもう無くなるのだ、吾々一千餘名の從業員は一生を通じこんな感激はもうないことだろう。

## 宮城を遙拜して去る

降下した社旗を兩手でガッチリ握りしめた中島氏の發聲で『君ケ代』が奉唱されたのち、最後の『時事新報從業員萬歳』が三唱された。そして宮城遙拜を行つたのち解散した。

委員の手に渡された社旗は多年本社の會議室に飾られ、闘爭開始以來吾ら從業員大會の中央に飾つてあつた福澤大先生の寫眞をくるみ大切に保管することになつた。

一方全從業員は九日間に亘る籠城の跡始末をつけて元通り室内を整理して互の幸福を祈り合ひ乍ら解散した。だが選ばれた繼續委員は次の仕事に向つて直ちに行動を起した。

あゝ……振り返れば昭和十一年も殘り僅かになつて突如全國的に大きな話題を提供し、わが國新聞史上に特筆……餘りにも悲慘な事ではあるが……すべき時事新報の解散も愛社心に燃える一千餘の從業員の血みどろの闘爭を最後にして終つたのだ。こんな悲慘な事實は今迄にあつたであろうか。否！正にわが國空前の出來事なのだ。

大毎、東日は時事新報の精神を受けついで云々との社告を出して讀者獲得の宣傳に利用してゐるだが吾々は公言する『眞に福澤精神を守り、時事新報傳統の精神を持つ者は吾等一千餘の從業員あるのみ』を終りに吾等は死力を盡して陰謀の徹底的糺明を行ふことを誓ひ、吾等に寄せられた多くの同情者に對し衷心から感謝の意を表するものである。

時事新報は無くなつた、だが吾等は如何なる職場に就くとも時事新報の精神は失はない。

『時事新報萬歳』『全從業員萬歳』



# 解散に至る迄

## 松岡、前田兩氏の乘込み

松岡、前田兩氏が新らしい經營者として時事新報に乘り込んで來たのは時事解散を去る一年餘前の昭和十年十一月十四日であつた。この兩氏を斡旋したのは大倉組の門野重九郎氏で門野氏は大毎の高石眞五郎氏の紹介に依つて兩氏を識り、これを時事新報の大株主に推薦した。殊に前田氏の如きは門野氏と一面識もなく、時事大株主の中には當時これをあやふんだものもゐた程であるが、門野氏は高石氏の紹介を楯に取つてこれを押し切つたものである。此の點時事新報解散の責任者の一人として門野重九郎氏が擧げられてゐるのも當然の事であらう。さて大毎の英文毎日主幹であつた松岡正男、大毎系の大阪夕刊社長前田久吉の兩氏が愈々時事經營者として乘りこむ事となるや兩氏の爲に運轉資金として約五十萬圓（七十萬圓とも云はれてゐる）の金が大株主の手に依つて用意さ

れ兩氏は東京會館に盛大な就任披露式を擧行して關係者並びに社會に向つて粉骨碎心時事新報の興隆を誓ひ同時に從業員に向つては『必ずや半期のうちに利益を擧げ業績を好轉して見せるから獻身的協力を求む』とて從業員に數ケ月のボーナスをすら約束するの豪語を以てこゝに兩氏の時事經營のスタートが切られたのであつた。

## 運轉資金を忽ちに浪費

兩重役就任後間もなく社内の陣容が一新された。大毎系のその一統が續々乘りこんで來た。殊に營業方面には井上販賣部長、春名廣告部長、佐藤營業局次長を始め平社員に至る迄所謂前田系が續々のりこんで來た。此の陣容一新を完了して然る後に彼らの取つた政策は先づ販賣擴張に主力を注ぐ事であつた。五十萬圓の運轉資金は惜しげもなくこの方面にバラまかれた。曾て東日で失敗の經驗をなめてゐる貸出しの制度が取られた。十一年の前半期は此の爲に一時的に發行部數が相當累增し一萬、二萬と增加して行つたが五月頃になつて五十萬圓の金が消滅する頃にはこの無理な販賣擴



張に後援つゞかず浮動讀者がドン〳〵落ちて行つたので六月には彼らの就任前よりもはるかに惡い成績に轉落してしまつてゐた。無理な擴張の結果は勿論收入を伴はない。後に前田專務が小說家宇野千代女史に時事新報の金を使つて經營させてゐた流行雜誌スタイルの時事專賣店押付けも手傳つて前半期の一時的部數增加にも拘らず非常な納入不良といふ結果を齎らしたのであつた。最後迄兩重役は我等に發行部數と廣告行數の增加とを宣傳し、此の爲に輪轉機註文の芝居や增俸說の放送などあらゆる策を弄しつゝこの目茶苦茶な政策と、その結果とを押し隱し世間的には時事新報の異常な躍進を信じさせ乍ら最後に株主に對し「時事新報は今や二百萬圓の增資か、然らずんば解散より外に道はない」と切り出した。その最大の原因として提示したものは實にこの販賣成績の惡化といふ事であつたのである。

## 内外を欺瞞して社内を攪亂

それ迄に大株主の數氏はしば〳〵兩重役に對し運轉資金の有無についてたしかめ『例の五十萬圓

はもうなくなつてゐるのではないか、なくなつてゐるならば何とか心配しやう』と申し出た人は一人や二人に止らなかつた。その度毎に兩氏は『あれは一年間は充分續くから心配はいらぬ、その先はもう黒字となるから自力でやつて行ける』と簡單に之らの提言を斥けてゐたものであるが、事實は五月にはとうになくなつてゐた。後に社員に説明した所に依れば、この五十萬圓は兩氏の全然知らぬ約手が三十萬圓出されてあつたので、忽ちこれに取られ、殘るところ二十萬圓しかなかつたとの事で兩氏が株主に對し何故にこのやうな嘘をついて資金の提供を拒んだのか、これは今にして漸くその意圖が判明したといふべきである。即ち彼ら兩名はこの金を短時日の間に販賣擴張に使つてしまつたのである。この目茶苦茶な政策の結果は非常な納入不良と發行部數の一時的增加から非常な轉落といふ事になつて現はれたのであつた。兩重役の經營は時事新報の內容を目茶々々にかき廻す事であつた。しかも世間的に如何に巧にこれがカムフラージュされてゐたかは例へば工業博覽會の如き、如何にも時事新報がやつてゐたやうであるがその實利益は一文も時事新報に入らないのみならず相當の宣傳費用を使はされて工業新聞に全部油揚を持つて行かれた一事の如く表面的には實



によく時事新報の躍進が宣傳されてゐたのである。前田が內報に使つた金は驚くべきものに達してゐるといふ事だ。

時事新報を如何にして解散に導くか、彼らの工作は着々として進められて行つた。六月には早くも今年一杯で解散が出來るとの見込みがついたものゝ如くである。當時井上販賣部長が何氣なく社の自動車の中で社外のある人に『今年一杯で時事新報は潰れる見込だ』と語つたのを運轉手君が聞いて不思議に思つた事實すらある。同時に松岡、前田兩重役の不可解の行動に對し大株主側では漸く警戒の色を濃くし始め、殊に前田に對する不信任の聲が高くなつて來た。殊に所謂遊星儀館と稱する天文臺を社の屋上に設ける六十萬圓計畫の提案を見るに及んで兩氏に對する不安の氣持は濃厚になつて來た。

## 兩重役不信任の聲起る

この天文臺の計畫といふのは獨逸に注文する機械四十五萬圓、その家屋の爲に十五萬圓、計六十

萬圓であつて時事新報の會計とは別個に匿名組合を組織してこれを經營させる、といふので新聞社の仕事としては不適當だとの反對論を他處に兩氏は「若し時事新報でやつてうまく行かないならば小林一三氏がひきついでやる筈だ」と稱して各方面を口說き廻つてゐた。その結果小林さんが後をひきうけるなら大丈夫だらう、と一般に贊成する向きが大部多くなつて來た所へ前田專務が交詢社で不用意にも『時事新報經營の爲に金を集めても到底集まりさうにもないから、遊星儀館の計畫で金を集めるのだ』と口を辷らせ時事新報社內にある義勇表奬會基會や、燈臺守慰安基金なども既に相當流用してゐるのだからこの名目で金を集めそれを流用してもかまはない、といふ意嚮を洩らしたのだから耐らない。それはひどい、刑事問題にもなる事だから注意した方が好い、と忠告するものも出て來るなど大部反響を呼んで結局これが爲東京では一文も金が出來ぬことになり、大阪方面で約廿萬圓の金を集める事が出來、これでやつと匿名組合を作る事が出來た次第であつて、兩重役の意嚮は天文臺を作る事に目的があるのではなく、金を集める事に目的があつたのである。

こういふインチキ手段を平氣でやるうな連中だといふ事が段々ハツキリして來るにつれ兩重役不



信任の聲は漸次大株主間に高まつて來た。松岡はまだよいとしても前田は時事新報を種に何をやり出すか判らないといふので、七月末頃から漸く經營者更迭論が擡頭するに至つた。これが結局八月末頃から始まつた山本悌二郎氏の乘込運動となつたもので一部にはこれが前田不信任のあまり眞劍に運動が續けられ、十二月の解散直前迄續けられてゐた。松岡、前田は自分らの排斥運動を必死となつて斥け乍らとう〳〵最後迄人手に渡さずに自分らの手で時事新報を殺してしまつたのである。如何にして體裁好く殺すか、といふのが彼らの宿題であつたから表面的には彼らは大成功である。從つて時事新報は松岡、前田が退陣してさへくれゝば解散せずに濟んだのである。これが事前にハツキリ判つてゐたなら社員の力で何とかなつたものを、返らぬ愚痴であるが如何にも殘念でならない。こゝに暫らく山本悌二郎氏乘込運動の經緯を略記して見やう。

## 山本悌二郎氏乘込運動

松岡、前田の出鱈目なやり方が漸く反感を買つて排斥機運が濃厚となつて來たのは先述の通り八

月末頃の事であつたが、この頃から福澤桃介、福澤大四郎、山本悌二郎等の諸氏の間に話が進められ、時事新報は目下の狀態では月に二、三萬圓の缺損といふ事であるから毎月これを補塡し、且その上相當の運轉資金を持つて入り込めばその復興は容易である。現在の重役に任せておいたのでは時事新報はどうなつてしまふか判らない。それには先づ前田を斥け松岡はそのまゝにしておいて山本悌二郎氏を社長に据へ、場合に寄つては大四郎氏が平重役に入つてもよい、といふ事に大體の意見が纏り、これは八月廿三日の熱海での會談であつたが、この結果門野幾之進氏を始め大株主數氏にこの話が傳へられ、幾之進氏も山本悌二郎氏なら差支へないだらう、贊意を表され他も大體に於て異論はないものゝ如くであつた。

次いで人を介して山本、門野（幾）兩氏の間に種々話が進められ相互の諒解が進み門野氏も山本氏の意嚮に他意なき事を認めたので同氏の乘込みは相當の可能性を帶びるに至つた。この機運が漸く熟し來り、愈々九月廿二日の紅葉館に於ける松岡、前田、山本、福澤桃介、大四郎諸氏の會見となりこゝに始めて山本氏乘込の運動が表面化し來つたものである。



此の前にも松岡、前田兩氏は此の話を聞いて躍起となつて阻止運動を試みた事實があり、山本氏個人についても色々誹謗がましい事を云つて歩いたりしたやうである。さて此の紅葉館の會談に於ては兩重役は徹頭徹尾不遜な態度に終始したとの事である。即ち時事新報は既に資金を注ぎ込まなくても充分自力でやつて行けるやうになつてゐる。時事新報は自力で充分復興し得るやうになつたからもう御心配は要らない。山本氏が來られるさうだが資金はどこから出るのか、政黨關係はどうするのか、山本氏は三田の關係がないから社長はこまる、平重役に入つて貰ふなら差支へない、など山本氏も流石にムッとする程であつたとの事で仲介者の桃介氏の如き後で兩氏の態度に非常に憤慨した事であつた。結局この會談はウヤムヤに終り、前田はそれから數日して西下し一週間後に歸京して桃介氏と會談を行ひ、この時もの山本氏資金出所をしつこく追究し、宇垣大將ではないか、中島知久平氏かそれとも關東軍か、それとも明倫會かなどゝうるさく聞いたさうで桃介氏もそんな事を答へる必要は一つもないとつゝばね、前田も時事新報の現在はそんな心配は一つもいらない私達が時事を潰すなどそんな馬鹿な事は決してしない。とハッキリ答へてゐる。實際は時事新報の內

容は彼らの手に依つて目茶苦茶になつてゐたにも拘らず、かうした態度に出てゐたもので、前田の西下は察するに大毎との打ち合せであつたものと考へられてゐる。更に此の話はそのまゝ十月に入り此の時山本悌二郎氏の議員拜辭の事があつたので前田はある人を通じて、山本悌二郎氏はかねて政黨關係などいつでも清算するやうにいはれてゐたが、今回の議員拜辭を見れば山本氏の決意固きものがうかゞはれる、ついてはそれについて山本氏といろ〳〵お話をしたいからお目にかゝりたいと會見斡旋を申し込み交詢社で會ふ事となつたがこの時は山本氏は相當心證を害してゐたものと見へ時事新報乘込みの話はこの際しばらく遠慮したいから、と申し出られ、山本氏乘込みはこれでどうやら一時立ち消へといふ形となつた。

## 重役更迭の裏をかく大芝居

所が十一月になつてから兩重役に對する不信任の聲は愈々高くこの際何とかせねばならぬ、先づ前田を何とかして斥けねばならぬといふ空氣が濃厚となり、山本氏乘出しは一旦立ち消へとなつた



が、更に福澤桃助、大四郎、鷲澤與四次の諸氏より松岡に對し、山本悌二郎氏は表面に出ない事とし背後から援助を爲し大四郎、鷲澤の兩氏を重役に入れて時事新報の更生をはからうではないか、との申し出を爲し、以前山本氏の三田關係なき事を理由として何のかのと澁つては難辭をつけてゐた松岡もこれには反對する事が出來ず『それならば全く問題はないではないか、どうぞそのやうにして頂きたい』と答へ、話はそれで決つて時事新報更生の爲に、首腦部の陣容を一新する事に決定を見たのが十一月の末の事であつた。

それから話はすぐに十二月八日の大株主懇談會即ち二百萬圓增資か、解散かの爆彈動議となつてしまひ、これにはあまりの飛躍に交詢社方面でも唖然として開いた口が塞がらなかつたものである此の點彼らの芝居は頗る鮮やかに行はれたのであつた。即ちある相當の資金を持つて乘り込んで來る人がある、といふのでそれを斥けて自分らの手で解散を斷行してしまふ爲に二百萬圓といふ途方もない數字を吹つかけてこれを牽制し、その間にすばやく解散を斷行してしまつたといふ譯なのである。

# 時事の解散は計畫的大陰謀

後織者は殆んど決つてゐた。然るにも拘らずこれをおさへて解散を斷行してしまつた、これが計畫的行動でなくて何であらうか。しかも十二月八日の大株主懇談會に於て『解散の意氣込みで二百萬圓增資に進む考へだ』と述べ翌九日には社内の從業員にも同樣に説明したので一同は二百萬圓增資を決行する爲に解散といふ脅かしの手を用ひてゐるのだナ』といとも甘く考へてゐたのも實はその反對で二百萬圓增資が解散の口實であつた。その胡魔化しも何の事はない、その一日前の七日に大毎の重役會で時事新報の營業權の讓渡を受ける事に正式決定してゐたのであるから全くお話しにも何にもならないのである。彼らは遮二無二時事新報を潰して大毎東日に持つて行つてしまつたのである。松岡、前田の兩名が大毎から年俸五千圓の割合で給與を受け乍ら時事新報を經營してゐた事を考ふれば將に思ひ半ばに過ぐるものがあるであらう。これは松岡が就任後間もなく政治部主催の宴席で醉餘うつかり喋つてしまひ取消しもならず今にして弱つてゐる事實である。その宴席上彼



松岡は『ひきうけた以上死んでも時事を再興して見せる、借金は財産と思へば何でもない、俺は斷じてやつて見せるから諸君協力してくれ』と豪語した、純な若い記者連は感激して中には泣いたものすらあつた。だから今にして松岡に對する憤激は一そう大なるものがあるのである。それ計りではない。解散といふ事を云ひ出す最後の瞬間まで成績の好轉を宣傳してやまなかつた。十一年の末には數ケ月のボーナスがもらへると聞かされ增俸があるかも知れぬ、とさへ聞かされた。池貝には部數增大を理由として輪轉機を注文してゐる。この大々的社告を見て誰が社の悲運を豫想し得たらうか。後にある大株主がこれを責めたところ「あれは最初から買ふつもりは全然なく、單なる宣傳の爲にやつたのだ」と白狀し最初から流してしまふつもりで注文してゐた意嚮を明らかにした。二百萬圓增資の話を聞かされた時も「社は非常に好くなつてゐる、もうあと一とふんばりといふ所である。この二百萬圓が出來れば朝日、東日を凌駕する事が出來るのである」と説明した。恐らく二百萬圓が出來たとしてもあのやり方では一年にして再び目茶々々にしてしまつたであらう。

一年の彼らの足跡はすべてが胡魔化しと僞りに滿ちてゐるものばかりである。彼ら二人は大毎東

日の重要訓令を帯びて時事新報にのり込み來り一年間を經て漸くにしてその使命を果し得たものである。福澤先生の創立された時事新報がこんな奸手段の爲に最後を遂げたといふ事が容認されていゝかどうか、これは世の識者の批判を仰ぎたいと思ふ。

## 遮二無二解散させた兩重役

さて十二月八日の大株主懇談會の席上で始めて兩重役の口から解散といふ言葉が出されたのであつたが、この席には例に依つて通常の懇談會と考へ、事實普通の通知狀を前日に發送したのみであつたから、この樣な大きな問題があるとは知らずに半數以上は出席して居らず、又これを聞かされた人々は異口同音に「こんな大問題を議するのならばもう一度やりなほしては如何」と提議したにも拘らず例に依つて二百萬圓增資を振りかざしてうやむやに閉會してしまつたのである。そして彼らは翌日の社員に對する說明と同樣最後迄二百萬圓增資に努力すると云ひながら彼等は何もしてゐなかつた。たゞ社員が騷いでは困まる、と思つたのであらう、しきりと社內工作をやつてゐた。十



六日には社員大會が行はれ增資贊成、解散絕對反對の決議がなされた。

そんな騷ぎのうちに日は迫つてとう〳〵廿四日になつてしまつた。各方面で株主總會の流會、延會等の運動が爲されてゐたが總てが徒勞に終つた。廿四日午前九時十二分開會、最後の株主總會は僅か十三分で時事新報の解散を決定、閉會してしまつた。以下がその速記錄である。

## 株主總會速記錄

時事新報の運命を決すべき第廿三回定時株主總會は昭和十一年十二月二十四日午前九時十二分より時事新報第一會議室に於て開始された、以下はその速記錄である。

◇(會長)松岡正男君　今日はお忙しい所を多數皆樣の御出席を得まして有難うございます、今日出席頂きました株主の方は十三名それから委任狀によつて出席の株主は七百七十三人でございましてその株數は二萬四千五十四株になります、その總數にしますと株主の人數は七百八十六名で株數は五萬六千九百九十一票でありますから總會は合法的に成立することになります。

それではこれから株主總會を開きます、第一の議案を審議したいと存じますが、これは昭和十一年下半期事業の報告書、貸借對照表　財産目錄、損益計算書承認の件でありますが、島田監査役からお手許に差上げておいた筈であります……

◇名取和作君　朗讀その他一切を省略してはどうですか。

◇松岡正男君　御意議ありませんか。

◇(監査役)島田乙駒君　監査役はこの計算を監査致しまして相違ないことを認めました。

◇松岡正男君　それでは第一議案を御承認預かつたものと認めます、それでは第二議案の方に移ります、そは御承知の通り時事新報に取りましては最も今後の經營に付て重大なることでありますので私共は責任者を決定しましてから今日まで最善の努力をつくしたのであります、所が今朝に至るまでも不幸にして増資の見透しが付きません狀態であります、御列席の株主各位において相當の株をお受け下さる方がございますならばこの際御發言をお願ひ致します(發言するものなし)

◇松岡正男君　それではどなたにもお意見の方がないものと認めまして第二號議案を撤回致します



それから第三號議案に移りますが、第二號議案が決定の結果と致しまして將來資金の缺乏により當然時事新報は現在のまゝ成立たないことになります、殊に私共は重大なる理由と致しまして福澤先生の遺された社是それを或は將來において汚すことあるべきを虞れもう一つは從業員の各位に對して御迷惑をかけないやうに考へてこの際解散の外、途がないといふことを考へたのであります、これは重役會議で決定し大株主、殊に福澤家一家の方々並に評議員の聯合の合議において相談しその結果已むを得ずこゝに來たのであります、これについては門野幾之進氏の非常なる御好意によりまして五十萬圓の金を調達することになり、なほもう一つは社の販賣權を讓渡することについては大阪毎日新聞から廿五萬圓の金を得たのであります、これを以て私共は株主各位に對してこれだけのことを言明することが出來ます、即ち今日の從業員に十分なる解散の手當と慰勞金を支給しそうして兎も角これらの人々の生活を脅かさないだけの用意があるといふことをお話し申上げることが出來るのであります、三號議案について御意見がございますならば伺ひます。

◇福澤大四郎君　新聞は廢刊するのですか？

◇松岡正男君　これによりますと十二月卅一日限り當會社を解散することになつて居りますが、出來るならば事情の許す限り、それまで續けたいと思つて居ります。

◇林毅陸君　時事新報の名義を總てやめられて仕舞ふのですか。

◇松岡正男君　さうなんです。

◇林毅陸君　營業權云々は詰り時事新報といふ名義を實際用ひられなくなる譯ですか？

◇松岡正男君　時事新報を大阪毎日新聞に合同といふ形式で時事新報の名は殘ります。

◇福澤大四郎君　大阪毎日新聞時事新報といふ名で發行すれば出來る譯ですな。

◇一株主　全體の處置は全部取締役に一任するといふことでありますが、今のお話に依ると大體に於てさう云ふ經路を辿るといふ暗示であるのですか、大阪毎日新聞が金を出して……

◇松岡正男君　それは今日まで我々は和戰兩樣の策において增資を圖り一方に於て若し增資が不可能の場合從業員に迷惑を懸けないで社是を保つて行かうといふ兩方面の工作を行つた結果、大體に於て增資の方は不幸にして出來なかつたが解散を施行すれば出來るといふ目途に達したのであります。



◇門野重九郎君　時事新報の名前は若し消えますと市井の無名の人が新聞を出しますが、さう云ふことのない樣にこの名を存してやつぱり行く譯ですか。

◇松岡正男君　さうなんです、結局他の人が勝手に使つて時事新報が墮落したと思はれるやうなことがあつては私は苦痛ですからこれを避けたのです。

◇名取和作君　東京日々新聞は勝手に使へるでせう、時事新報といふ名義を預けてゐるのではない時事新報といふ名が大阪毎日の所有になるのですね、東京日々は勝手に使へる、他の人は使へない、さう云ふことになりますね。

◇松岡正男君　さう云ふことなんです。

◇福澤大四郎君　東京日々時事新報と云ふ名で發行する意思がありますか。

◇松岡正男君　それはまだ分りませぬ。

◇林毅陸君　時事新報といふ名前を全然消して仕舞ふといふことには行かないのですか。

◇松岡正男君　假に此處で消したとしても何處でか時事新報といふ名稱を保護するものがなければ勝手に使へるでせうね。

◇林毅陸君　勝手にやつてもその時事新報は福澤先生には關係ないでせう。

◇松岡正男君　それはさうですが我々としては將來時事新報が發行されるといふことは不愉快です名前が後からのものと混用される嫌ひがありますから時事新報といふ名稱を保護したいといふ考へ方であります。

◇林毅陸君　保護といふ考へ方があるが、私一個としては名前が消えることを望む、他の者が使ふといふことがあつても差支へないと思ふ。

◇松岡正男君　勝手に使ふといふことになれば消えないといふことになる、それですから勝手に使へない樣な方法を執る方が賢明でないかと私共重役會で決定したのです。

◇名取和作君　林君の言はれることは非常に意味のあることで考へなければならない、時事新報といふ名前を誰にも使はせないで保存して置かないと日本新聞の樣に一週間か一ケ月に一寸した一



枚の紙を出して、伊藤さんが永い間保存して、終ひに伊藤さんが出來なくてやめてしまつたので今度は小川平吉が日本新聞といふ名前を執つたといふ例がある。

◇門野重九郎君　謂はゞ其處へ預けると云ふか、讓渡するといふか、それが先刻お話の廿五萬圓といふものでございますね。

◇松岡正男君　さうであります。

◇福澤大四郎君　販賣權と名前を同時に讓るといふことになるのですね。

◇松岡正男君　さうです。

◇福澤大四郎君　解散手當は充分大丈夫間違ひなく行くんですか。

◇松岡正男君　間違ひありませぬ——それでは解散といふことに決して御異議ありませぬか（『異議なし』と叫ぶ者あり）

◇松岡正男君　それでは三號議案は決定しました、終りに私共光輝ある時事新報の解散の當事者になつたといふことは皆樣方に對して申譯ございませぬ、事情此處に致りましたことはどうぞ皆樣

方の御諒解を願ひたいと思ひます、それではこれで閉會致します（午前九時二十五分閉議）



# 外部よりの後援

## 記者團總聯盟の全國的援助

籠城第一夜は緊張裡に明けて、廿五日朝の編輯室には新なる闘争への活氣が漲つてゐた。この時外部からの激勵第一報が飛び込んで來た。前編輯長で現在九州日報に居られる森田久氏の舊部下を思ふ慈愛の電報である。

『貴社の解散を聞き感慨無量、各位の御自愛を祈る』

電文は直に場内にアナウンスされる。急霰の拍手。この第一報をきつかけに信書、電報或は直接口頭で我々の正義の戰ひを激勵し、陣中見舞品を惠贈して籠城團の士氣を鼓舞せんとするもの、ひきもきらず、特に時事解散の眞相、從業員破邪の蹶起が次第に一般に知れ亘るにつれ、時事新報愛讀者は勿論、津々浦々からの同情、激勵の叫びは糾然と起り、前後旬日に亘つて籠城を續けた從業

員に、どれ程、目的貫徹の勇氣と責任を感ぜしめたか分らない。殊に、今回の從業員大會に絶大なる精神的自信を與へた新聞通信記者團總聯盟の有形、無形の支援こそは自衛力薄弱な勤勞階級の今後の運動に對し重大なる示唆を與へたものとして特筆すべきであらう。

## 總聯盟直ちに活動を開始

これより先、二百萬圓增資達成か、然らずんば解散かの時事株主總會の成行きを凝視して居た新聞通信記者團總聯盟では廿四日、早朝から首相官邸内假事務所に幹部が待機し、『解散決定』の情報を得るや、即刻、緊急總會を開催、社會正義の立場から疾風迅雷的に時事僚友支援の活動を開始した。即ち、同日の總會に於ては、この年末に當り多數從業員を街頭に投げ出した經營責任者の非違をなじると共に從業員の生活權擁護のため今後あらゆる支援を惜まざる旨の決議をなし、代表を擧げて時事新報社を訪問、松岡、前田兩重役に面會して決議文を手交し、更に警視廳並に丸ノ内署を歴訪して、今後、從業員の運動に對し不當彈壓の如きことなきやう充分なる諒解を求めた。



その夜、從業員は遂に福澤精神死守と生活權擁護を叫んで惡德重役に抗爭を宣す。翌廿五日祭日は終日重役との交渉を續け、愈々目的貫徹まで斷乎籠城の悲壯なる決意を固む。

よつて、總聯盟では廿六日、緊急幹部會を開き、籠城中の時事從業員代表を招致して、その後の運動經過を聽取し、直に緊急總會を續開して籠城の時事僚友支援のため左のメッセージを送ることゝなり、且つ陣中見舞として加盟各クラブ金五圓也の醵金を可決、第一次資金として金六十圓を贈る。

## メッセージ

時事新報が前後五十年に亘り吾國言論界に占めたる光輝ある歴史を捨てゝ今回遂に解散の悲運に逢着せることは吾等の痛憤に耐へざる所なり。殊に解散に至る手續に於て一部經營責任者の執れる措置は狡獪、酷薄を極め社會正義の立場からも、これを看過し得ざることは既に我等の指摘したるところなるも、今や時事新報の僚友諸

君はその要求のために斷乎として蹶起し、堂々たる集團的抗爭に入らんとす。新聞記者團總聯盟は諸君の要求と行動とを全的に支援し、諸君がその團結を飽迄强化して所期の目的を貫徹せられん事を祈る。

茲に新聞記者團總聯盟はその全力を擧げ諸君背後の支援者たらんことを誓ふ。

昭和十一年十二月廿六日

新聞通信記者團總聯盟

## 時事新報社僚友諸君

かくて、このメッセージは直に時事籠城團に傳達され、大會壇上に於て朗讀された。各方面からの支援激勵に感激した從業員は、更にこの總聯盟の積極的な背後支援を受けて、どれだけ勇氣づけられたか知れない。

翌廿七日、時事解散の眞相を揭載した愛國新聞二百部を總聯盟の名によつて幹部總出動で聯盟から閣僚、樞密顧問官、兩院議員、都下記者倶樂部その他に發送。



廿八日、總聯盟は緊急總會を招集、第二回陣中見舞として八十圓を贈り、代表十一名が時事新報社を訪問、松岡、前田兩重役に面會、解散資金七十五萬圓の使途を中心として兩重役の非違を徹底的に究明し、社會世論の代表者として兩重役の善處を迫る。かくて代表十一名は、舊編輯室に籠城團を慰問激勵の演說をして士氣を鼓舞した。

更に總聯盟代表は三十日、潮內相を訪問、時事僚友の正義の抗爭の經過を傳へ、惡德重役に對する監察當局の善處を要望する等、あらゆる背後支援の手段を盡した。

## 各記者倶樂部も擧つて支援

かゝる總聯盟の强力なる集團的援助は時事從業員に絕大なる自信力を與へて最後まで堂々の抗爭を繼續せしめたが、從來、團體的抗爭力を缺くと云はれてゐた勤勞階級が、一度、その生活權擁護を叫んで蹶起した場合、總聯盟の如き背後的連鎖が如何に必要であるかは今回の時事從業員大會の際に最も明かに示現された。

更に、この籠城十日間に各記者倶樂部、各種團體、愛讀者各位その他各方面から賜つた電報、文書等の激勵の言葉、金品、みかん、サンドウイッチ、すし、煙草等の陣中見舞品は莫大な數にのぼり、その度毎に場内特設のマイクロフオンを通じて社外の支援者の厚い好意がアナウンスされる。そして場内の意氣は益々擧り、徹宵籠城團は一つの蜜柑を分け合つて各方面の支援に感泣、或は寒天の門野邸前に頑張る挺身隊の人々に溫い慰問品となつて送りとゞけられる。

激勵の言葉に曰く『福澤精神の傳統を守れ』そして又、『君達は全新聞界、否な全サラリーマン階級のチヤンピオンだ、頑張れ！』籠城團はこうした激勵の一言一句に益々その結束を固くして行つた。そして、その度毎に『弱いサラリーマンでも團結した抗爭によつて正しい主張を通してみせる』の覺悟を益々固くして行つた。

## 愛讀者からの激勵の信書

A、

『愛國新聞』紙上にて時事新報廢刊の眞相を知る。横暴なる前田、松岡の策動によるわが愛する



時事新報の虐殺に抗して起つ全從業員の抗爭に滿腔の支持をなす。

どうぞ勝て下さい！

世田ヶ谷區　一愛讀者

B、

時事新報の皆様。

民衆の友、大衆の代辯者だつた時事新報が僞られた日々合同のために廢刊になつたことは誠に大衆の一人として悲しみに耐えません、一千人の從業者の皆様の年の暮を控へた經濟的混迷に、心からの同情を捧て居ります・・・力强い民衆の聲が背後に充々てゐる事を自覺して飽くまで時事新報が再興するやうに大いに戰つて下さい。

皆様の味方なる一女性。

西村勝子（假名）

C、

三十日皆さんの手になる新聞を讀みました、東京日々新聞は一生涯讀みません、否、子々孫々に至るまで讀みません、何卒、最後の五分間まで一人殘らず頑張つて下さい、頑張つて彼ら資本家に我々おとなしい俸給生活者も、時に團結するものであることを示してやつて下さい、全俸給生活者のために衷心よりお願ひします。

時事新報萬歳！　從業員諸君萬歳！

三田　一讀者

D、

拜啓　御寒さきびしき折柄時事新報解散の悲報に接したゞ〳〵驚き入るのみ昨日やまと新聞を讀むにつけ皆様方の無念いかばかりかと胸のうち御察し致し口惜し涙にむせぶばかりです、長年時事新報を愛讀いたし今、東日を手に取る私達の目も心もとなく、何とぞ〳〵記者團の皆様方、初



志を貫徹なさり福澤大先生の御心にそむかぬ様、御奮闘、御努力の程御祈り申して居ります、同封致しました金額誠にお恥しきものなれど何かの足しに御用ひ下されば本望と存じます、御寒さはげしき時なれば御身體御自愛下され御奮闘下さいませ。

王子　一愛讀者

E、

この年末に從業員御一同様には時事新報社に御籠城の御由、誠に御同情に堪えません、昨日時事新報を拜讀して私は感泣致しました。御人格高き福澤先生の御生命とも申します時事新報の御解散、靈魂不滅の福澤先生も、たゞ御無念の御事と感泣致しますが福澤先生の御門下にも相當資産家も有力の御方様も澤山おありと存じます、此の際御厚恩ある福澤先生に對し、この時事新報を何故御援助遊ばさぬかと心外に存じますが、長者の萬燈、貧者の一燈、誠にお恥しく存じますが、せめてこの晦日のおそばなりと存じ金百圓御送附致しますから、皆様でおそばなりと召し上つて

下さいませ、この上ながら正義のため御奮闘を御祈り申します。（完）

蒲田町六五〇　歌野繁子（假名）



昭和十二年一月十八日印刷
昭和十二年一月二十五日發行

定價金十錢

著者　東京市京橋區木挽町（朝日ビル內）
　　舊時事新報從業員會編纂

發行兼印刷人　東京市京橋區木挽町（朝日ビル內）
　　津田正彦

印刷所　東京市麴町區九段一ノ四番地
　　文雅堂印刷所

大東毎日資本閥に蹂躙
…版權所有…
されたる福澤精神

發行所　東京市京橋區木挽町（朝日ビル內）
舊時事新報從業員會

337
885

終